中央电视台电视教育节目用书

星期日日语

4

1983

日曜日の たのしい 日本語

369.4
0/4

中央电视台电视教育部编
广播出版社出版

星期日日语4

日和日の
たのしい
日本語

H369.4
20/4

中央电视台电视教育节目用书

星 期 日 日 语

日曜日のたのしい日本語

1983—4（总4）

中央电视台电视教育部编

广 播 出 版 社

星期日日语83—4

〈总第4期〉

中央电视台电教部编

广播出版社出版

外文印刷厂印刷

新华书店北京发行所发行

1983年11月第1版　1983年11月第1次印刷

787×1092毫米　16开　印张3.5　字数89千字　印数1—28,000

统一书号：9236·026　定价：0.45元

目　　录

1.君よ、憤怒の川を渉れ（追捕）……（1）

2.東山魁夷の世界（画家——东山魁夷）……（29）

3.きじ——日本の国鳥（雉——日本的国鸟）……（36）

4.西陣の帯（西阵腰带）……（41）

5.母と子の旅（母子之行）……（45）

《星期日日语》每星期日下午三时起由中央电视台第一套节目播送

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

君よ、憤怒の川を渉れ

恵　子：「強盗犯人よ！ みつけたのよ、早く来て！ こっち……」

……　……

恵　子：「あの男！ あの男が犯人よ！ 早く捕えて！」

……　……

警　官：「ちょっと君、交番[1]に来てもらいましょうか。」

杜　丘：「間違いじゃないですか。あなた、人違いしているよ！」

恵　子：「人違いだって？！ あんた、あたしが銀行から下ろしといた二十万と、ダイヤ[2]の指輪[3]と、それから……それから……あたしの体、おもちゃにしたじゃないの！ けだもの！ 人違いなんて、よく言えたわね！」

警　官：「住所化名は？」

杜　丘：「……ここでは話したくない。」

警　官：「なに？」

杜　丘：「署に行って話す。本庁[4]の矢村警部[5]を呼んでくれ。」

……　……

矢　村：「あなた、十月三日の午前二時頃、何してました？」

杜　丘：「俺を信じないのか？」

矢　村：「俺は、誰も信じない。何してました？」

杜　丘：「十月三日午前二時頃は、俺は家で寝ていたな……」

矢　村：「なるほど。証人はいますかね。」

杜　丘：「いや、おらん。俺は一人で住んでるし、電話もなかったな。」

矢　村：「そうですか。つまり、アリバイ[6]はないわけですね。」

小　川：「なんですか……」

中　塚：「立つんだ。」

……　……

小　川：「おい、ちょっと。ちょっと。被害届を出された寺田俊明さんですね？」

……　……

小　川：「十月三日の午前一時頃、自分のアパートに帰って来るとあなたの部屋からカメラその他を持ち出し、逃げようとしている男と顔を合わせた……そうですね？」

寺　田：「そ、その通りです。」

小　川：「その時、あなたが見たと言う窃盗犯人[7]なんですがね。この中にいますか。」

……　……

寺　田：「こ、この男です！」

……　……

寺　田：「間違いありません。確かにこの男です。」

小　川：「じゃ、ご苦労さんでした。どうも。」

……　……

小　川：「警部、この男の素性[8]を明してもらいましょうか。」

……　……

矢　村：「ひと晩、泊めといてくれ。」

小　川：「チェッ。本庁の警部どのって面しやがって。おい、貴様[9]何者だ。」

……　……

恵　子：「この男よ！」

寺　田：「この男です。」

杜丘の声：「二人共、俺を誰と間違えたんだ？……俺とそっくりの男？そんな馬鹿な！二人の人間が間違える程似てる男なんか。じゃ、どうしてだ？何故だ？」

……　……

伊　藤：「大変なことやってくれたな。杜丘君、検察庁始まって以来の不祥事だ。君は現職の検事なんだぞ！」

杜　丘：「検事正[10]、私は何もやっておりません。」

伊　藤：「だとしても、現職の検事が強盗強姦[11]の容疑者[12]として逮捕されたと言うだけでマスコミ[13]が大騒ぎをするのは決まっている。」

杜　丘：「私は無実です！」

伊　藤：「君が無実だとすれば、一刻も早く、その事を証明しなければならない……君のデスクとロッカーは調べさせてもらったよ。」

杜　丘：「何か出ましたか？」

伊　藤：「いや、これから、君の家に家宅捜査に行く。君も一緒に行くんだ。」

杜　丘：「私の無実を証明するためにですね？」

伊　藤：「君に不審[14]の点がなければ、そこで始めて、新宿署[15]に君の身分を明かし、例[16]の水沢と寺田の裏付調査[17]をする……。会議でそういう結論になったんだ……。早く靴をはきたまえ。」

……　……

伊　藤：「キャノン[18]ＥＦ……ボディナンバー[19]は……」

矢　村：「一一〇九二六。」

伊　藤：「間違いない。寺田が盗まれた物だ。」

杜　丘：「これはおれのものじゃないよ。きのう出かける時までこんな物はなかった！」

矢　村：「細江！」

細　江：「はい。」

矢　村：「隣の部屋。」

……　……

杜　丘：「検事正、これは誰かの、誰かの罠[20]です。私は何もやっておりません。信じて下さい。」

矢村の声：「検事正！」

伊　藤：「プラチナ台[21]一文字0.05カラット[22]五ご。間違いなく水沢恵子の物だ。」

細江の声：「警部！ありました！」

……　……

矢　　村：「検事正、紙幣ナンバー？」

杜丘の声：「罠だ……完璧な罠だ……。」

伊　　藤：「杜丘君……なぜだ？！なぜ君は……こんな馬鹿げた真似をしでかしてくれたんだ？！」

杜　　丘：「検事正……」

伊　　藤：「聞きたくない。これ以上、君の言うことを信じるわけにはいかん！事実を法務省[23]に報告する。……早急に君の処分を考えなきゃならんからな。」

杜　　丘：「おっ」

……　……

矢　　村：「どうした？」

杜　　丘：「吐き気がするんだ。……トイレに行かせてくれ。」

……　……

細　　江：「刃物はこれだけです。」

杜　　丘：「俺は自殺などしないよ。」

矢　　村：「ドア開けとけ。」

……　……

矢　　村：「杜丘！あけろ！」

細　　江：「検事……開けて下さい。」

矢　　村：「杜丘！」

矢　　村：「杜丘ッあけろ！」

……　……

伊　　藤：「え……杜丘冬人の容疑事実はその……まだ確定はしておりませんが、しかし、杜丘の行動はその……刑法第九十九条の逃走罪[24]に該当する。……従いまして、協議の結果、杜丘冬人はとりあえず東京地検検察官の職を……。」

……　……

杜　　丘：「管理人さんですか。」

古　　谷：「どなたですか。」

杜　　丘：「私はこのアパートに強盗に入ったと言われている杜丘と言う者です。」

古　　谷：「入りなさい。」

……　……

古　　谷：「水沢恵子なら、今朝、出て行ったよ。」

杜　　丘：「引越したんですか。」

古　　谷：「それよりあんた。三十分おきに警官がここへ……」

……　……

古　　谷：「あんた、ここがええ。……はい。」

警　　官：「やあ、度度どうも。」

古　　谷：「いや。」

警　　官：「異常はありませんか。」
古　　谷：「いや、別に。」
……　……
警官の声：「水沢恵子から何か連絡でもなかったですか。」
古谷の声：「いや、ないですなあ。」
警官の声：「そうですか。じゃ、どうも……」
古　　谷：「いや、ご苦労さん。」
……　……
古　　谷：「ハハハ、これでわし[25]も共犯かな。」
杜　　丘：「ご迷惑かけました。」
古　　谷：「いやいや、水沢恵子より、あんたの方が信用できそうな気がしてな。」
杜　　丘：「何か彼女におかしな点でもあったんですか。」
古　　谷：「あの女は、十月一日にここに越して来た。」
杜　　丘：「今年の十月一日ですか。」
古　　谷：「ああ、夫婦喧嘩をして、別居したいから借してくれちうことやった。」
杜　　丘：「そうですと、彼女は十月の一日に越して来て、三日に強盗に入られ、十日に犯人を見つけて、その翌日に出ていった。そういうことですね？」
古　　谷：「実は……水沢恵子に迷惑をかけてはと思って警察にも新聞にも黙ってたん。」
杜　　丘：「何ですか。」
古　　谷：「部屋を出る時、小荷物を持ってた。その宛先が能登半島[26]にある能登金剛[27]の生神ちゅうだった。
杜　　丘：「能登金剛の生神ですか。」
……　……
杜　　丘：「ごめん下さい。ごめん下さい。」
……　……
杜　　丘：「この人です。水沢恵子さんでしょう。」
主　　人：「この花嫁なら、手塚の民雄さとこの娘じゃないや。加代ちゃんいうてね。」
杜　　丘：「加代……？ 水沢恵子さんって言うんじゃないんですか。」
主　　人：「いやあ。五年程前に嫁に行ったさけ[28]……何ちゅう[29]にかなあ、婿さんは。東京でタクシーの運転手してるちゅうだっけが。
杜　　丘：「それで、その加代さんという人は、今、東京でしょうか。」
主　　人：「昨日、そこのバス停[30]で会ったさけ、帰って来てるんじゃなかろうか。」
杜　　丘：「その手塚さんの家はどこでしょうか。」
……　……
杜　　丘：「ごめん下さい。ごめん下さい。……」
……　……
恵　　子：「この男よ！」
寺　　田：「この男です。」
……　……

細　　江：「主任！石川県警[31]から横路加代の亭主[32]の写真、電送[33]してきました。ちょっと、見て下さい。」

矢　　村：「何だ！こりゃあ……寺田俊明じゃないか。これは……」

細　　江：「そうなんですよ。新宿署で逢った男です。」

伊　　藤：「どう言うことなんだ。夫婦で偽名[34]を使って、杜丘を告訴するなんて。」

矢　　村：「この男の居所は？！」

細　　江：「はあ、加代の実家[35]の話では、北海道[36]のこの男の郷里に帰ってるらしいです。ええ、様似郡の小海辺ってところです……」

……　……

杜　　丘：「すみません。横路さんのお宅はご存知ですか。」

　　男：「あ……あれがそうです。」

……　……

杜　　丘：「すみません。あの……」

　　男：「杜丘なんだ。」

刑 事 達：「杜丘！待て！杜丘！」

……　……

刑 事 達：「杜丘！待てッ！」

「おい、待てッ！杜丘」

「止まれ！杜丘！」

「止まらんと打つぞ！」

……　……

矢　　村：「杜丘は逃げた。道警[37]の非常線[38]を突破して、日高山脈[39]に逃げこんだらしい。今、山狩[40]の最中だ。それから、参考人の横路、こいつは一先足に行方をくらましてる。」

矢　　村：「なお、十月三日杜丘が新宿でやったという窃盗及び強盗強姦なんだが、これは寺田俊明、水沢恵子が横路敬二、加代の夫婦の偽名だったということからして、多分、この二つの犯行はガセだと思う。つまり、杜丘は二人にはめられたわけだ。」

矢　　村：「しかし、横路加代殺しに関しては、いくつかの状況証拠[41]から言って、杜丘の犯行に間違いない！以後杜丘は殺人容疑に切り替える。さて、問題は何故、横路夫婦が杜丘をはめこんだか。……細江君！」

細　　江：「はい。」

矢　　村：「ちょっと、横路の経歴をしゃべってみて！」

細　　江：「はい。……、ええ、横路敬二と加代は、昭和四十五年六月結婚。ええ、事件直前まで大井町のアパートに住んでいました。横路はタクシーの運転手ですが、四年程前に、妙な商売を……モルモット[42]や兎や二十日鼠[43]、それに昆虫なんか飼っていたんです。」

伊　　藤：「そんなもん、どうするんだ。」

細　　江：「解剖や薬の実験に使うんで、大学の実験室や病院、それから、製薬会社の研

究室が得意先[44]だそうです……」

矢　村：「杜丘との関係は？！」

細　江：「それは別にありません。……杜丘と横路との関係はいくら洗っ[45]ても出てこないんですかね。」

矢　村：「よし、分った！これから、俺は北海道に飛ぶから君たちは杜丘と横路のつながりを徹底的に洗ってくれ！それから横路は多分、東京に潜入するかも知れない。見付次第[46]直ちに押えろ。鍵がこの野郎だ！」

……　……

男　A：「逃げられたか。……畜生！」

男　B：「サツ[47]の山狩りに見つかるとうるさいからな、ひとまず[48]あきらめよう……」

……　……

杜丘の声：「俺を罠にかけただけじゃなくて、命まで狙ってる。……誰なんだ？何故、俺を狙うんだ？」

杜丘の声：「俺を……俺の社会的生命を奪うために、罠にかけたとしたら、あの事件しかない。」

……　……

杜　丘：「地検[49]の杜丘だ。」

……　……

矢　村：「代議士[50]先生の事件となると検事までお出ましだ。」

杜　丘：「まあ、ご苦労さんです。」

細　川：「ご苦労さんです。」

杜　丘：「どんな具合だ？」

矢　村：「自殺ですよ。ぜんぜん事件になりません。」

矢　村：「七階のレストラン[51]から飛び降りたんです。目撃者も大勢います。」

……　……

長　岡：「朝倉代議士が相談があるって、電話がかかってきましてね……」

杜　丘：「相談というのは、どういうことだったんですか。お差支えなければお伺いしたいんですが。」

長　岡：「それが、相談も何も、お話を聞かぬうちにいきなりパッと[52]立ち上って、わめいて走り出しましてね。全く驚きましたよ。」

……　……

杜　丘：「確かに状況だけ見れば、朝倉は自殺でしょうが、彼に自殺する理由がないんです。動機がないんです。」

矢　村：「じゃ、同席していた長岡が催眠術でも使って朝倉を飛び降りさせたちうわけですか。」

杜　丘：「長岡了介は政界の黒幕[53]だ。……何か、朝倉の決定的な秘密を握って脅迫したとすると……」

伊　藤：「長岡さんが朝倉代議士を脅迫したと言う証拠でもあるのかね。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

杜　　丘：「わたくしの想像です。」
伊　　藤：「警視庁[54]は自殺と言う線で事件を処理してしまった。単なる君の想像だけで、捜査を再開するわけにはいかんということぐらい、君にも分るだろう……」
……　……
杜丘の声：「俺は、一人で捜査を始めた。あの日曜日は、朝倉の妾[55]がやっていた新宿の小料理屋に聞き込みに行ったんだ。あの日、俺が新宿に居ることを知ってたのは、あの小料理屋に関係のある奴だ。そいつが横路加代に……」
……　……
恵　　子：「この男よ！」
横　　路：「この男です！」
……　……
杜丘の声：「横路敬二だ。あいつこそ、真相を知ってるんだ。あいつを捕えなきゃ……。」
……　……
女 の 声：「助けて！ 誰か！ 助けて！ 誰か！ 誰か！ 助けて！ ……助け……」
……　……
真 由 美：「お帰りなさい。」
遠　　波：「命の恩人の具合はどうかな？」
真 由 美：「今朝、気がついたんだけど、食事したら、又眠ってるわ。安岡先生に見ていただいたけど、すごく疲労してるんですって。」
遠　　波：「そうか……しかし、あんな山の中で、何してたんだろう。」
真 由 美：「道に迷ったって言ってたわ。だけどそのおかげで、わたし、命拾いしたのよ。」
遠　　波：「そう言えばそうだな。目が覚えたら、私が礼を言いたいと伝えてくれ。」
……　……
真由美の声：「お父様、いいかしら。」
遠　　波：「どうぞ。」
真 由 美：「どうぞ。」
遠　　波：「やあ、こりゃどうも……、娘が大変なところを助けていただいたそうで、何とお礼を申し上げたらいいか……」
杜　　丘：「いいえ、お礼を言わなきゃならないのは私の方です。かえって、いろいろご迷惑をおかけしたようで。」
遠　　波：「いや、いや、いや。」
真 由 美：「どうぞ、おかけになって。」
遠　　波：「さあ、どうぞ、おかけ下さい。」
杜　　丘：「失礼します。」
真 由 美：「お父様のジャンパー[56]……すこし古いけど着ていただいたの。」
杜　　丘：「すみません。」
遠　　波：「いや、いや、いや、よくお似合いだ。真由美、お名前は伺ったのか。」
真 由 美：「あッ、忘れてたわ。」
杜　　丘：「……前田と申します。」

遠　　波：「真由美！前田さんと一杯飲むから、何か見っくらって来てくれないか。」
真由美：「はい！ではお父様ご自慢のチーズ[57]でも持って参りましょう。」
遠　　波：「おのみになるんでしょう。ブランデー[58]がよろしいかな。」
杜　　丘：「ちょうだいします。」

…… ……

遠　　波：「杜丘さん！自首するつもりはないですか。」
杜　　丘：「……」
遠　　波：「私は次の道知事選[59]に立候補[60]するため、あちこち飛びまわっている。明日もまた、札幌[61]に行きます。ご一緒にいかがです？」
杜　　丘：「事情があって、今自首するわけには参りません。」
遠　　波：「真由美は私が四十になってから出来た一人娘でね、……母親は、あの子を生むと死んでしまった。だから、月並な言い方だが、私は、真由美を眼の中に入れても痛くない。……その娘が、あんたに関心を持っている……」
杜　　丘：「ご迷惑はおかけしません。」
遠　　波：「追い出すようで、済まん……」

…… ……

遠　　波：「なに？」
中　　山：「社長、お電話です。」
遠　　波：「ちょっと、失礼。」

…… ……

遠　　波：「何で、そんな余計なことしたの？」
中　　山：「しかし、道知事選の事を考えますと……」
杜丘の声：「警察に通報したのか。」

…… ……

真由美：「杜丘さん！早く乗って！」
杜　　丘：「……？！」
真由美：「誰かが密告したの！機動隊が三百人。街道は全部封鎖されてる。早く、早く乗って！」

…… ……

杜　　丘：「どうして、俺を助けるんだ？！なぜだ！なぜなんだ？！」
真由美：「あなたが好きだから！」

…… ……

捜査課長：「遠波さんが秘書に電話させている間に、窓から逃げたようです。……牧場内はくまなく捜索中ですが、まだ何の手掛りも……」
捜査課長：「また、山に逃げこんだとなると厄介ですな。二百や三百で山狩りしたところで発見は不可能です。」

…… ……

矢　　村：「あんたも大した狸だな、遠波さん。」
遠　　波：「君は……？」

矢　村：「ええ？本庁の矢村というもんだよ。……あんたね、警察に協力するとかなんとか言いながら、初めから杜丘を逃がすつもりだったんじゃないか。そうだろう？！」

中　山：「失礼な。……社長は次期道知事選に立候補されるんですよ。まさか、そんなことを……」

矢　村：「黙ってる！お前さんは。」

中　山：「何だって……？！」

遠　波：「中山君……」

矢　村：「だって、ここはあれだろう。従業員は五十人以上いるんだから、ねえ！杜丘を突き出すぐらい、訳ないんだ。なんでそれをしない？！」

遠　波：「……」

矢　村：「昨日から、杜丘はここにいたんだろう。ちゃんと分っているんだからだめだよ。とぼけたって。」

遠　波：「……」

……

矢　村：「何とか言ったらどうだ！」

矢　村：「逮捕してもいいんだよ、この場で！犯人隠匿[62]の現行犯なんだから、あんた。」

真由美：「見当違いよ！」

……

真由美：「父は何も知らないわ。逮捕するなら、この私をどうぞ！」

中　山：「お嬢さん！」

真由美：「警察にしらせるつもりなんか、初めからなかったわ。だって、あの人は命の恩人なんですもの。」

矢　村：「何ですか、命の恩人ってのは……」

矢　村：「教えて下さいよ。杜丘はどこにいるんだ？」

真由美：「知らないわ！」

矢　村：「知らないってことはないだろう！」

真由美：「かりに知ってたとしても絶対に言わないわ。逮捕するおつもりなら、早くなさったらどう？！」

遠　波：「真由美！」

矢　村：「ふん！大したじゃじゃ馬[63]だ。調教の失敗だなあ、ありゃ。全員引きあげ！」

課　長：「はッ？」

矢　村：「時間の無駄だ。」

課　長：「はッ！」

……

真由美：「杜丘さん！」

……

真由美：「警察が引き上げたから食糧を持って来たわ」

杜　　丘：「すみません。」
真 由 美：「警視庁から、警部が来ていたわ。気取ったサングラス[64]をかけた目つきの悪い厭な感じの人。」
杜　　丘：「矢村だな。」
真 由 美：「矢村？」
杜　　丘：「真由美さん、ここを出なきゃだめだよ。」
真 由 美：「どうして？」
杜　　丘：「あいつが黙って引き上げるわけないよ！」
真 由 美：「……？」
杜　　丘：「あんた、つけられてるんだ。出よう！」
……
矢　　村：「横路加代殺害容疑だ。逮捕する！」
……
真 由 美：「違うわ！この人は……」
杜　　丘：「余計なことを言うな！この人は関係ないんだ。見逃してやってくれ！」
矢　　村：「よし分った！その代りジタバタ[65]するなよ！貴様が動くといろんな人が迷惑するんだ。」
杜　　丘：「……」
矢　　村：「あんたも来てもらおうか」
……
矢　　村：「どうした？」
杜　　丘：「熊だ。」
……
真 由 美：「杜丘さん！杜丘さん！」
真 由 美：「大丈夫？！」
杜　　丘：「大丈夫だ。」
真 由 美：「待って！」
……
真 由 美：「どうしたの？」
……
杜　　丘：「矢村！しっかりしろ！」
真 由 美：「まっすぐよ。」
……
杜　　丘：「真由美さん！押えつけて！」
真 由 美：「ええ。」
矢　　村：「あっ！」
杜　　丘：「しっかり押えてろ！」
真 由 美：「ああっ」
……

杜　　丘：「矢村、助かりたかったら辛抱しろ！」

……

杜　　丘：「真由美さん、何か縛るものを！真由美さん、真由美さん！何か縛るもの！」

矢　　村：「杜丘！何で俺を助けたんだよ？えっ？助けられたからって、手はゆるめねえからな。」

杜　　丘：「矢村！横路はどこだ。居処[66]を教えろ！」

矢　　村：「そりゃ俺の拳銃[67]だろう？返えしゃ教えてやるよ！」

杜　　丘：「返事が先だ！どこにいるんだ？答えなければ打つ！」

矢　　村：「よし！奴は俺たちが押える前に、函館[68]から東京へ飛んだよ。ウソじゃねえ。さあ！返してくれよ！」

……

矢　　村：「動くな！お嬢さん、この男を縛ってくんねえかな！」

真 由 美：「卑怯[69]よ！」

矢　　村：「悪いけど早くしてくれないかな。でないと打つぜ。本当に……」

真 由 美：「恩知らず！」

矢　　村：「動くな！」

杜　　丘：「矢村！弾は抜いといたよ。」

……

真 由 美：「ここよ、ここにほら穴があるの。」

……

真 由 美：「ライター[70]を借して。」

杜　　丘：「いろいろありがとう、真由美さん。そんなことは自分でやるから。あなた、早く牧場に帰った方がいい。」

真 由 美：「途中で夜になるわ。わたしを熊に食べさせる気？」

……

真 由 美：「これからどうするの？私にも秘密？」

杜　　丘：「東京へ行く。無実を証明するためには、どうしても横路と言う男に会わなきゃならない。」

真 由 美：「私も行く。」

杜　　丘：「お父さん心配しているよ。早く帰るんだ。」

真 由 美：「父はあなたを裏切ったのよ。」

杜　　丘：「俺は警察に追われている人間だぞ！」

真 由 美：「あたしも共犯者よ！」

杜　　丘：「……！」

真 由 美：「あなたしかいないの！」

……

中　　山：「お嬢さん！」

……

遠　　波：「真由美！」

遠　　波：「ゆうべおそく矢村警部が戻って来た。お前があの杜丘と一緒に逃げたと言ってな。」
真由美：「……」
遠　　波：「私はゆうべ、一晩中眠れなかった。」
……
遠　　波：「答えろ！ 真由美……私はお前の父親だ！」
真由美：「違うわ！」
遠　　波：「……」
真由美：「娘の命の恩人を警察に売るような人は、私の父親ではありません。」
遠　　波：「真由美……」
真由美：「卑怯よ！ お父様は……中山が警察に電話するのを黙認したんでしょう。」
……
真由美：「私も犯罪者よ。逃亡幇助の罪を犯しました。早く警察に通報するといいわ。」
……
中　　山：「止めて下さい！ お嬢さん！」
真由美：「立ち聞きしてたのね。……どいて！」
中　　山：「社長は大事な道知事選挙を控えているんです。今、お嬢さんがあんな殺人犯なんぞにかかりあっては……」
……
遠　　波：「真由美！」
……
刑事達：「あッ！ 主任！ お帰りなさい！」
細　　江：「主任、大丈夫ですか。」
伊　　藤：「杜丘はどうした？」
矢　　村：「杜丘は北海道に閉じこめて来ましたよ。動き出せば、必ず網にかかりますからね。」
伊　　藤：「そんな馬鹿な。北海道に潜伏するつもりだったらどうするんだ。」
矢　　村：「彼は必ず動きだしますから。」
伊　　藤：「なぜ！ どうしてそう言えるんだ。」
矢　　村：「逃げまわるだけで満足する男じゃないでしょう、やつは。横路を追って必ず動き出しますよ！」
伊　　藤：「横路も殺すつもりだと言うのか！」
……
真由美：「あっ、よかった！」
杜　　丘：「ありがとう！ 地図を持って来てくれた？」
真由美：「ここよ！ 家中のものを集めて来たわ！」
……
杜　　丘：「シィーッ！」
……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com